

## 主体的、対話的、深い学びになるために

主体的、対話的、深い学びが話題になっている。

最近、文部科学省も単なるアクティブラーニングではなく、「主体的、対話的、深い」学びという言い方になっている。言葉（アクティブラーニング）が先行しないように、表現を変えてきている。

学校では、「主体的、対話的、深い」学びを目指し、授業改善を行っている。

さて、アクティブまたは主体的、対話的、深い学びとは如何なるものか。

私は、毎週水曜日 22:25～のNHKテレビ「総合診療医ドクターG」を手本としている。

医者は、（専門にもよるが基本的には）知識が大切である。

多くの病名と症状を知っておかないといけない。

その知識のデータベースから、主訴を当てはめていき、病名を特定するのである。

データベースの容量と判断力が重要になる。

そして、病気によっては、ドクター個人で対処できなくなり、カンファレンスを行うことになる。

番組では、指導者ドクターと研修医三人との対話だが、研修医の主体的・深い学びが大切になる。

さて、学校に当てはめよう。

何度か書いてきたが、知識・技能・体験が基盤となり、そこから話し合いが始まるのである。

間違っても、課題を書いてすぐに「話し合ってみなさい」なんてそんなにあるものではないだろう。

①何を学ぶか（知識・技能）

②どこで生かすか（思考・判断・表現）

③よりよい人生を送る（学ぶ意欲）

うまいことできている。

さあ、原点に戻り、基本の習得が大切なのである。

でも、間違っていけないのは、かつての暗記・詰め込みではないことはおわかりであろう。